

— 今月の投書 —

物を大切にしない日本人

「もったいない」はどこに消えた。



私事で恐縮ですが、昨年の11月に自宅マンション屋内駐車場でゴルフセット一式が盗難に遭いました。キャディーバッグを駐車場敷地内に置き、隣接するショッピングモールで買い物を買ませ、戻るまでのたった10分のことです。

幸いなことに地元警察の協力もあり、1週間後には持ち去った人物も特定され、無事にゴルフクラブも戻ってきたので、訴えは取り下げましたが、まさか自分の身にこのようなことが起こるとは夢にも思いませんでした。

捜査を担当した刑事課の警官に話を聞くと、持ち去った人は日本国籍ではない方で、マンションの粗大ごみ置き場に出されている物を見ると「なんで日本人はまだまだ使えるものを捨てるのか」と常日頃から思っていて、過去にも何度か自宅に持ち帰ったことがあったそうです（確かにバッグを置いた場所は、指定の粗大ごみ置き場のすぐ脇

でした）。

その話を聞いた時に、そういえばここ数年の間に随分と廃棄に出される物が増えたと感じ、一体いつから日本人はこんなに簡単に物を捨てるようになったのか素朴な疑問を持ちいろいろと調べてみました。

もちろん、日本人が物を大切にしなくなったという近年の共通認識の背景には、複雑でさまざまな要因があり、こういった変化がいつごろから始まったのかを特定するのは難しいのですが、次のようなポイントが考えられます。

① 経済的豊かさで消費社会の台頭

戦後の高度成長期以降、日本の経済は急速に発展しました。この経済成長により、物の入手が比較的容易になり、消費社会が形成され、その過程で物の価値や大切さが相対的に低下した可能性があります。

② 使い捨て文化の普及

近年、使い捨て製品や短命な製品の普及が進んでいます。これにより、物が一時的な存在として扱われ、長期的な価値や大切さが薄れる傾向が見られるようになってきました。その一方で、戦前の日本では、修理と再利用が日常生活の中で深く根付いていました。例えば、衣類が破れた際には捨てずに繕い、できる限り長く使い続けるだけでなく、「裂き織り」と呼ばれる、古布を裂いて織り直す技術を駆使することで新しい布地を生み出していました。また、壊れた道具や器も修理をして使い続けることを良しとし、その副産物として器の割れを修理する「金継ぎ」の技術が広まり、壊れた物に新たな美を見出すようにもなりました。



割れた器を、漆を使って修復する「金継ぎ」。

③ 都市化と生活スタイルの変化

都市化の進展や生活スタイルの変化により、個々の人々が物に対する関心や責任を失いやすくなったとする見方もあります。

都市生活ではスペースの制約があるため便利さを求める傾向が強くなり、物を大切にすることを希薄になりがちです。つまり、戦前までのように、「自給自足」だったり、地域社会の中で行われていた「物々交換」のようなものは現在の都市生活には不要な営みとなっています。

④ 価値観の変化

20〜30代の若年層を中心に、所有よりも経験やサービスを重視する傾向が強まっています。このため、物自体の価値が相対的に低下する傾向にあります。

ただし、これら4つの要因が一緒に全ての日本人に当てはまるわけではありません。個々の人々や地域によって異なる価値観や意識が存在し、物を大切にしているのもまた事実です。戦後の高度成長期以降、これらの習慣は一部失われたのかもしれませんが、過去から現在に至る間に育まれてきた、この美しい習慣や文化を忘れることなく生きていくことが大切なのではないでしょうか。

次号では、現状に至った要因を日本特有の「核家族化」の側面から考えたいと思います。

(田中佳介)